

## ポスト冷戦時期の文化批評

桑 島 由美子

### 要 旨

冷戦後、90年代の中国語圏文化批評は、近現代中国文学研究の転換点に重なり、文学史の時期区分では「ポスト新时期」「ポスト・アレゴリー」など批評家の概念が錯綜した時期でもある。「後学」論争の発端に遡ると、北米学术界における思想潮流と、近現代中国文学研究をめぐるディシプリンの問題、非西洋社会研究としての「地域研究」への批判や、冷戦期モダニズムに饗応した「新批評」へのイデオロギー批判が見られる。

歴史主義から文化批評への転換、批評理論によるテキスト分析など、80年代以降の学术界における近現代中国思想・文学研究は変貌を遂げて行く。この過渡期の中から「モダニズム」の厳格なエリート主義でもなく、保守主義の「後学」派でも無い、新しい批判的知性が顕在化して来ると同時に、メディア、表象芸術など文学から「文化研究」への傾斜は、一面で90年代中国を覆う「新イデオロギー」への対抗を標榜するものでもあった。ポスト冷戦時期の文化批評における「文化転型」の土壌として、北米における近現代文学研究、文化思潮とその主要な文献について考察したい。

キーワード：「新批評」文学史観の二律背反、中西文化対話と「言語転折」、モダニズム文学の典範化、北米中国学界の中国文学思想研究

## 序

### 歴史主義から文化批評への転換

90年代文化批評においては、知識人における言説の転換を象徴する「後学論争」について分析を進めていきたい。その発端となったのはアメリカの『近代中国』“*Modern China*” 1993年第一期に寄せられた英語論文「現代中国文学研究のイデオロギーと理論：中国学の典範問題論争」であり、後に香港『二十一世紀』に舞台を替え、論争が継続された。“*Modern China*” に寄稿された論文とは、プリンストン大学のペリー・リンク (Perry Link) 教授、ブリティッシュ・コロンビア大学のミハエル・デユーク教授、カリフォルニア大学の張隆溪教授の論文である。この批評への応答として書かれた劉康『中国現代文学研究の欧米における転換—あわせてペリー・リンク、ミハエル・デユーク、張隆溪教授に答える—』<sup>(1)</sup>の内容からは論争の発端が窺われる。

冷戦期における西欧中国学は、おおかた歴史学者、政治社会学者によって推進されたため、中国における文学批評や理論の専門性について理解が乏しい。学術研究が極めて政治性を体現しているため、濃厚な冷戦イデオロギーの色彩を帯びている。チェコの学者プルセークと在米の夏志清の論争に見られるように、論争の実質は、現代中国文学の左派主流と非左派作家の政治観点の分岐を遡上に乗せるものであった。欧米中国学では、現実の政治を観察する文献にすぎない文学作品は、もともとイデオロギーの道具であって、内在する芸術的価値は乏しく、文学として鑑賞、研究するに値しないとされる。

作品の言語、構造、形式の分析を通じた洞察は見られない。「テキスト」の含意する歴史、文化、社会の重層的な意味を解釈するに際しては「主題先行」に走りがちである。

中国古典文化については、独異性、差異性、文化相対主義が認められるが、現代中国文学に関しては、中国の経験に立脚し、西欧の理性主義と実証主義を基礎とした社会学・政治学的観点は、かえって研究に学理とロジックの両面での困難を醸成した。「外在」する方法論によって、「内在」する文学作品を研究するという規範的なタブーが認められる。

次に劉康は夏志清の『中国現代文学史』についても論評している。「新批評」文学史観の二律背反として、批評観点、興味、規範は芸術的な基準を第一とし、芸術至上の形式主義批評を標榜していること、文学作品の道徳倫理性を十分重視している。しかし中国近現代文学の主要な形式はリアリズムであり、夏志清の新批評の観点と欧米モダニズムの審美趣味は左翼文学思潮とリアリズム言語形式の分析に立ち入ることを妨げている。また「モダニティ」に対する見方は、文化史・思想史に対する誤読であるとしている。つまり中国現代文化と思想史が西欧と異なる「モダニティ」を有しているということである。

新批評がアメリカで力を得る 1940 年代初頭には、歴史や心理学を援用する様々な「新しい批評」が存在したが、テキストから外在要因を排除し、テキストと世界の韌帯を切り離そうとする営為は文学の特権化、洗練化を促すと同時に、「非歴史的」であることは科学を標榜する批評の依拠する「歴史的コンテキスト」を意味した。また冷戦の時代にあつて、それは多様でありながら有機的統合としてのアメリカニズムを体現し、文学研究における一定の制度化を果たす。しかし 1960 年代には、批評方法としてのニュー・クリティシズムは、脱構築がその命題の幾つかを引き継ぐことになり、衰退していった。<sup>(2)</sup> 思想的潮流としての新批評は、文献学と文学史というヨーロッパ的伝統から、新しい修辞学と詩学を優先することによって、文学研究の領域を刷新する役割を担ったとされる。

劉康は、「新批評」文学史観の二律背反として、夏志清の著作は、60 年代初頭に世に出たが、当時はモダニズム文学が西欧市場における有力商品であり、新批評がそれを推奨し、更には学术界を席卷した。また当時は冷戦意識が圧倒的に優勢な時代であったが、新批評の文学観は冷戦イデオロギーと対立するものではなく、相呼応するものであった。夏志清の著作は新批評のモダニズム審美主義によって、西欧における中国近現代文学研究を合法化するものであった。それはテキスト細読の気風を開いたが、その「テキスト分析」が「テキスト」の背後にある、複雑に錯綜する歴史社会的コンテキストを結果として捨象したとしている。

次に李欧梵の『中国近現代作家の浪漫派世代』(*The Romantic Generation of Chinese Writers*) については、ブルーセク、フェアバンク (John K Fairbank)、シュウォルツ (Benjamin I. Schwartz) ら歴史主義的な観点の影響と啓発を受けて、アメリカの中国系学者、李欧梵は中国近現代文学史上におけるロマン主義思潮を「時代精神」として捉えた力作で、歴史主義の『典範』としている。しかし 80 年代以降の文化批評的角度から見れば、彼が依拠していた歴史分析フレーム、歴史主義の系統立った言説モデルは、「脱構築」をはかる必要があるかも知れない。歴史主義から文化批評への転換としては、90 年にアメリカのカリフォルニア大学出版社が比較文学研究者のアンダーソン (Marston Anderson) の著作『リアリズムの限界——中国革命時代の小説』(*The Limits of Realism: Fiction in the Revolutionary Period*) を出版した。アンダーソンは「文化批判」の角度から中国近現代文学の理論、批評、創作、を分析し、中国新文学のリアリズム形式の礎石を据えた魯迅、葉紹鈞、茅盾、張天翼の作品を細読している。その後、台湾、香港、大陸から欧米にきた青年学者によって、中国文学批評と文化思想界、西欧中国学界と西欧当代文化理論界、学术界との間に、対話、交流、相互の疎通の機運が高まって行った。

“*Modern China*” に寄稿された論文が「後学」論争の発端だったとすれば、欧米中国学界に対して、左翼文学思潮の伝統への理解を促しつつ、学術研究における「文化的政治的

隷属と参与」を見極め、冷戦収束後の世界政治と文化の中における新しい冷戦意識に警告を促す。次に、冷戦終結後の北米中国学界における現代中国文学研究について、その動向を詳しく見てゆきたい。

## 北米漢学界の中国文学思想研究について

西方“中国研究”(Chinese Studies)を見たとき、それは広範な内涵を持つ学科概念である。70年代は北米中国学界にとって重要な転換点であり、「冷戦」終結に伴い、「反共」的立場からの研究は退潮に向かい、中国現代文学の研究ジャンルは拡大し、西方文芸理論による作家論や、中国新時期文学へも関心が集中した。70年代の重要な学術会議としては、1974年8月ダートマスでの「五四時期的中国文学」研究会(シンポジウム)。1979年ハーバード大学が主催した「中国現代文学與表演芸術」討論会などがある。1982年アメリカの聖ヨハネ(ジョージ)大学で行われた「当代中国文学：新形式的写実主義」研究会。会議は金介甫(Jeffrey Kinkley)主催で、同編纂による論文集が『毛沢東以後：中国文学與社会, 1978-1981』として1985年にハーバード大学出版社から刊行され、10年来の大陸と台湾の文学作品に対する理解と鑑賞を含めて新時期文学の全面的に討論したことで注目を集めた。(Jeffrey Kinkley, ed.: *After Mao: Chinese Literature and Society, 1978-1981*. Cambridge: Harvard University Press, 1985)

1986年にはドイツで比較的重要な国際学術討論会が開かれている。「中国現代文学的大同世界」であり、ドイツの馬漢茂教授(Hulmut Martin)とウイスコンシン大学の劉紹銘(Jhoseph S. M. Lau)が共同主催した。この時は欧米、大陸、台湾の学者が当代文学を比較文学的に討議した。大陸作家の張辛欣、楊煉、台湾作家の李昂などが紹介され、会議後葛浩文(Howard Goldblatt)編纂の論文集『分離的世界：中國当代的作品及其読衆』(Howard Goldblatt, ed: *Worlds Apart: Recent Chinese Writing and Its Audiences*. Armonk, NY: M. E. Sharpe, 1990)が刊行されている。

1986年には中国で最大規模の新時期文学国際シンポジウムが開催され、欧米、アジア、オーストラリアから57名の学者が参加している。1990年代にはウェスリアン(Weslyean)大学の魏艾蓮教授と王徳威教授(David Der-Wei Wang)がハーバードで、二十世紀中国小説と電影という議題で大会を開いた。研究方法の多様性が注目された会議の論文集では、劉紹銘、杜邁可(Michael Duke)、金介甫、梅儀慈(Yi-tis Mei Feuerwerker)、周蕾(Rey Chow)等十二名の学者の論文が掲載された。同年10月にはデューク大学で、最初の盛会が開催されているが、このシンポジウムの主催は中国比較文学北米学会であり、『中国現代文学中的政治與意識形態』である。論文集のテーマは『現代中国的政治、意識形態和文学

話語：理論干預と文化批評』であり、大陸出身の劉康と唐小兵が編纂、フレドリック・ジェイムソンが序言を書いている。

(Liu Kang & Xiaobing Tang, eds.: *Politics, Ideology and Literary Discourse in Modern China: Theoretical Interventions and Cultural Critique*. Durham and London: Duke University Press, 1993)。

重要著作の側面から見ると、夏志清の『中国現代小説史』以後に、大きな発展が見られるが、『小説史』の特徴は、作品の美学的価値や、修辞の水準に切り込んだことにあり、「新批評」によるテキスト細読という新しい境地を開いた。夏志清には多くの英文著作があり、『夏志清論中国文学』(C. T. Hsia: *C. T. Hsia on Chinese Literature*, New York: Columbia University Press, 2004)があり、夏志清の“中国文学”(Chinese Literature in Perspective)、“伝統戯曲”(Traditional Drama)“古典及近代小説”(Traditional and Early Modern Fiction)及び“現代小説”(Modern Fiction)の四項目16編の文章から成る。

夏志清以後、長足の進歩を遂げた現代中国文学研究において主要な著作を挙げると、夏済安の『黒暗的閘門』(Tsi-An Hsia: *The Gate of Darkness: Studies on the Leftist Literary Movement in China*. Seattle, WA: University of Washington press, 1968)は、夏済安がカリフォルニア州立大学バークレー校東西研究センターで、二十世紀二十年代から五十年代の中国左派作家の文芸、政治活動を分析したもので、魯迅の「神格化」という伝統的観点に対して再考を促した論文でもある。もう一冊は前述した李欧梵の『中国現代作家的浪漫一代』(Leo Ou-fan Lee: *The Romantic Generation of Modern Chinese Writers*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1973)があり、李欧梵は北米中国学界を代表する学者となった。

これまでに見られなかった傾向として、作家の専題研究が見られるようになったことで、1982年には梅儀慈の『丁玲的小説：現代中国文学中的叙事與意識形態』(Yi-tsi Mei Feuerwerker: *Ding Ling's Fiction: Ideology and Narrative in Modern Chinese Literature*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1982)であり、丁玲の20年代から30年代、延安時代から新中国成立までの重要な作品を通して「主観主義」から「社会主義リアリズム」までの創作過程を詳述している。沈從文については金介甫が資料により詳述した『沈從文傳』(Jeffrey C. Kinkley: *The Odyssey of Shen Congwen*. Stanford California: Stanford University Press, 1987)があり北米中国学界における沈從文研究のメルクマールとなった。

80年代に入っの魯迅研究としては、萊爾 (Willian A. Lyell, Jr) が1976年に発表した『魯迅的現實觀』(Willian A. Lyell, Jr: *Lu Hsün's Vision of Reality*. Berkeley: University of California Press, 1976)があり、当時スタンフォード大学アジア語系勤務

であった著者が魯迅入門書として著したものである。80年代中期に入ると李欧梵が魯迅の専門著作として『魯迅及其遺産』(Leo Ou-fan Lee, ed: *Lu Xun and His Legacy*. Berkeley, CA: University of California Press, 1985) があり、二年後には『鐵屋中的吶喊』(Leo Ou-fan Lee: *Voices from the Iron House: A Study of Lu Xun*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1987) があるが、見解は卓抜であり、厳正な分析によって、魯迅の雑文芸術を肯定的に捉え創見に富んだ著作である。

80年代末には、呉茂生 (Mau-sang Ng) が比較文学的にロシア文学の中国文学における流変と影響について述べた『中国現代小説中的俄国英雄』(Mau-sang Ng: *The Russian Hero in modern Chinese Fiction*. New York: State University of New York Press & Hong Kong: The Chinese University Press, 1988) において、郁達夫、茅盾、巴金及び魯迅を取り上げている。

その後の現代文論で最も重要なのは、鄧騰 (Kirk A. Denton) オハイオ州立大学の准教授である。1988年にトロント大学で博士号を取得している。その他、李欧梵と王德威については詳述があるが、ここでは省略したい。<sup>(3)</sup>

## 90年代における言説の転換

中国においては80年代には改革前の中国社会主義の実践を封建的伝統に擬え、民主化運動においては「反封建」が掲げられたように、80年代の「新啓蒙主義」は西欧の資本主義的モダニティを意味していた。しかし90年代に入ると西欧的価値に対する懐疑が起り「西欧近代の普遍的諸価値」にあわせて中国の成熟度を測定するようなものであったことに対する深い反省が起きる。その後、西欧体制内部の批判的知性（ポストモダン）を実践的、社会機能的なナショナリズムの言説として転用する傾向が顕著に見られ、90年代以降の中国の政治的「保守主義」の旗振り役を果たしている、と言う内外の批判を浴びた。その結果、文革や80年代の新啓蒙主義について何ら総括が成されないまま、89年に「歴史が集結」し、90年代からポスト新時期が始まるとして「モダニティ」の内実は封印される。ポストモダン批判者はこれを「モダニティ」の危機と捉え、政府側の現状肯定のための歴史認識がそれを隠滅していると指摘する。

90年代半ばには、近代化が現実化し、劇的な変化によって、従来とは次元の異なる文化・社会状況を読み解くための系統的知識としてポストモダンが急速に浸透していった側面がある。系統的ではないので、一つのテキストや語彙が突出したり、多くの学説が乱立したりという現状となった。

20世紀の歴史に鑑みれば、「民族主義」や「文化大衆化」というタームは、啓蒙主義と

## ポスト冷戦時期の文化批評

官制キャンペーンが複雑に絡む中で、度々浮上して来ているが、当代西欧批評理論の導入以降を見ると、それは時に保守の言説となり、体制批判に向けられるなど、非常に両義的に機能してきているのがわかる。

なぜ中国の知識界は保守化したのか、ナショナリズム、そして排外的な民族主義も、近代史における伝統的なそれとは異なり、いわばグローバル化の副産物として新たに生じてきたものである。論争の中でも、全ての論者に共通して言えるのはグローバル化による文化危機への危惧である。中国においてサイド、ホミ・バーバ、スピヴァクなどのポストコロニアル理論のもとで結果として孵化したのは、「第三世界批評」であり、「本土文化建設」だった。

「後学」論争の中では、在米中国人学者が80年代の「西欧的モダニティ」を知識人が一方的に放棄し、ポストモダンによってモダンを飛び越えたとして批判し、民主・人権などを受け入れエリート文化を堅持するよう呼びかけている。中国側はかつて改革前の社会主義を「硬直化」したマルクス主義として否定した論法で、西欧普遍的価値とは「硬直化」したモダニティであるとして、受け入れを拒否している。また「反近代の近代」という中国独自のモダニティの基本的性格に着目し、西欧的近代への無条件の服従に警鐘を鳴らしている。

「中国のポストモダニズムは希望を市場化に託している。」と言われるように、90年代、中国は「市場」と言うよりは「市場社会」、つまり全ての運営ルールを市場の軌道に合わせることにより、「新しい統治イデオロギー」の再建を完成させることになる。新しい社会形態を中心的でイデオロギーに支配されない「新状態」と解釈し、商業化と消費主義を容認していく。80年代文化運動の主力を担った青年知識人は多くは商業文化、俗文化主流を容認する集団利益傾向が見られた。論壇においては「世俗化」の対立項である「人文精神」について抽象的な「人文精神の失墜」という総括が成され、知識界の「言説の転換」は決定的となる。

中国における90年代文化批評を考える時、ポストという接頭辞の意味は、89年に歴史が「終結」し、90年代から「ポスト新时期」が始まるとされ、80年代の知識人による新啓蒙運動が封印された状況を指す。日本の思想状況と比較されるポストモダン受容においても、中国においてはそこにグローバル化が重層的に重なり、「モダニティ」をめぐる議論が焦点化されている。ポスト冷戦時期の文化批評を概観する上で、重要と思われる文献として『90年代後学論争』について概観したい。この著作は大きく2部に分かれ、前半が文化批評であり、後半が政治性と歴史意識である。

前半では劉康が新しい冷戦意識として「文化的政治的隷属と参与」の問題を提起し、そこに形成されたグローバル化文化想像の中での中国特殊論が、知的従属とイメージの倒錯をもたらしている点を強調している。

次に張頤武が、中国における「ポストモダン」理論は、常に解釈活動に身を置き、抽象、虚幻の学に化すことなく、西欧への「対抗性」を自負するものであり、「ポスト新時期」の文化発展中に活力として認識している。また中国は西欧の価値観念に迎合することなく、その背後にあるイデオロギー権力関係を省察する権利を有し、国際文化における中国の位置づけから、国際間の問題が中国に与える影響がより重要であるとしている。また現在の知識界には、三つの異なる言説モードがあるとして、一つは、人文精神の熱狂的な追求、二つ目は、学術の「経験性」を強化した空疎な「思想史」としてのポスト国学、三つ目には「保守化」の絶対化された本土的立場を挙げている。

鄭明は、民族伝統の継承と革新の議論において、五四新文化運動と白話を批判する立場を鮮明にしている。一方で、大陸では依然として20世紀以前の古典的見方が通用しており、言語は語法、修辞、思惟のロジックなどで制御できる表現の従順な道具であると思っているが、中西文化対話の前提として「言語転折」を経なければならないとしている。

後半では徐賁が、官製文化と新しい統治イデオロギー形成における「後学」の関与について述べている。即ち官製文化や文化政策、歴史区分などに積極的にポストモダン理論が寄与したことへの批判が見られ、とりわけ「ポスト新時期」理論におけるジェイムソンの影響を指摘するとともに、これを一種の「変異」現象としている。

次に趙毅衡がポストモダニズムによる自国の人文伝統の解体、知識人の言説の剥奪、多元同化など、体制化された俗文化主流に冷静な批判を求める。歴史的には五四運動と80年代文化熱の「アカデミーから横溢した」文化批判の延長に今日の議論があると認識しており、エリート主義を放棄しない立場を堅持する。張隆溪は、「ポスト・アレゴリー」に向かう文化転型をめぐる、西欧批評理論と中国文学研究が提起した問題を総括している。<sup>(4)</sup>

## 北米における文化批評のテキストについて

文学・美学に関わる英文テキストとしては、張旭東 (Xudong Zhang) について触れておきたい。

まず1997年にDuke Universityから出版された“*Chinese Modernism in the Era of Reform*”があり、改革開放時期の中国モダニズムについての論著として注目される。文化言説の分析においては、文化熱や文化論争のモチーフについて紹介され、文学のディスコースとしては格非など先鋒派の文学言説についても分析されている。銭理群、黄子平、陳平原の中国二十世紀文学や文学史の再考、言説の拡散や第五世代監督の映画などについての詳細な記述が見られる。社会的全景のアレゴリーとしての映画分析（陳凱歌の「子供たちの王様」張芸謀の「紅いコーリャン」）、そのイデオロギーと、モダニズムの言説につ

いて論述されている。

10年の歳月を経て、2008年に同じく Duke University から出された “*Postsocialism and Cultural Politics—China in the Last Decade of the Twenties Century—*” では汪暉ら新左派の誕生についても、ポスト天安門の知識人における政治言説の転形というスタンスで取り上げられ、ナショナリズム、大衆文化、知識人の戦略がキーワードとなっており、新時期の文化政治を展望する内容になっている。文学言説の可能性について見れば、上海ノスタルジーとして90年代の王安憶、批評のイコノグラフィとしての上海、莫言の文学、ニュー・シネマとしては、ナショナル・トラウマ、グローバル・アレゴリーとしての田壮壮の「青い嵐」、張芸謀の「秋菊の物語」が挙げられる。

アリフ・ダーリクとの共編としては、2000年にやはり Duke University から “*Postmodernism and china*” が出版され、張旭東自身の論文はポストモダニズムとポスト社会主義という現在の、歴史化についての論考がある。同時期2001年に Duke University から出版された張旭東編 “*Whiter China? Intellectual Politics in Contemporary China*” では、第1章でネオリベラル・ドグマに対する徹底した討論が行われ、序章では編者自身による “*The Making of Post-Tiananmen Intellectual Field: A Critical Overview*” で、90年代の思想文化状況が概観され、10章の “*Nationalism, Mass Culture, and Intellectual Strategies in Post-Tiananmen China*” では更に中国知識界の言説を詳細に分析している。

また、英文ではないが、中国とアメリカ（ニューヨーク）での批評論文や講演を収録した『批評的踪跡 文化理論と文化批評 1985-2002』（生活・読書・新知 三聯書店 2003年）では文字通り、90年代を挟んだ10数年の足跡を辿ることが出来、英文からの翻訳も入るが、ポストモダン文化理論の中国への紹介書となっている。特に重要な論文は、ベンヤミン、ジェイムソン、記号論、朦朧詩についての文論である。更に、2005年北京大学出版社から刊行された『全球化時代的文化認同 西方普遍主義話語的歴史批判』は、ニーチェ、マックス・ウェーバーに依拠した文化政治を紹介するとともに、多元文化時代の歴史主体について北京大学の学生との討論を行っている。新世代における東アジア（中国）のウェーバー解説として見ると、学術面での深化も注視すべきだが、より以上に時代的な色彩が濃厚である。アメリカ、中国の他に、台湾や香港でも関連文献を収集する機会がある。

張旭東と言えば、ベンヤミン研究の重鎮であるが、翻訳に長い解説文を付したベンヤミン著、張旭東 魏文生訳『発達資本主義時代的抒情詩人 論波特萊爾』2010年7月刊（城邦讀書花園）を台北で入手した。訳者序『ベンヤミンの意義』はかなり長文である。

新左派の全貌を捉える基本文献としては中国社会科学出版社刊『思潮：中国“新左派”及其影響』（2003年7月）がある

## 結語

現象面から90年代「文化転換」の諸相を見ると、冷戦イデオロギーの溶解による西側の「雪解け」を背景にして、北米学術界における現代中国文学思想研究が蘇生する中で、リーヴィス (Leaves, F.R) に代表される新批評の影響を受けた夏志清、李欧梵の歴史主義を経て、90年代文化批評への転換に向かう。しかし本質的には新批評的な一種のエリート主義、即ち道徳批評でありながら、文学研究の精緻化、知性の繊細な統合への志向が、90年代以降の文学、美学をめぐる文化批評にも接木されているように思われる。北米における90年代文化思潮は、大陸学術界へも往還する現象が見られ、複数言語のテキストを視野に入れたその全貌の解明が待たれる。

## 註

- (1) 劉康「中国現代文学研究在西方的轉型——兼答林培瑞，杜邁可，張隆溪教授」『二十一世紀』総第19期，香港中文大学中國文化研究所 1993年10月
- (2) 詳しくは，フランソワ・キュセ著『フレンチ・セオリー アメリカにおけるフランス現代思想』NTT出版 2010年 p62「文学と理論」を参照のこと。
- (3) 北米中国学の状況については，朱政惠編『美国学者論美国中国学』上海辞書出版社，2009年，王曉路主編 劉岩復主編『北米漢学界的中國文学思想研究』四川出版集团 2008年を参考にした。
- (4) 汪暉 余國良編『90年代的「後学」論争』香港中文大学 中国文化研究所  
以上の記述は，本著に掲載された主要な論著の集約である。

## 参考文献

- (1) 葛浩文 (Howard Goldblatt) 編纂『分離の世界：中國当代の作品及其読衆』(Howard Goldblatt, ed: *Worlds Apart: Recent Chinese Writing and Its Audiences*. Armonk, NY: M. E. Sharp, 1990)
- (2) 劉康・唐編纂『現代中国的政治，意識形態和文学話語：理論干預和文化批評』(Liu Kang & Xiaobing Tang. eds.: *Politics, Ideology and Literary Discourse in Modern China: Theoretical Interventions and Cultural Critique*. Durham and London: Duke University Press, 1993)
- (3) 夏志清『夏志清論中国文学』(C. T. Hsia: *C. T. Hsia on Chinese Literature*, New York: Columbia University Press, 2004)
- (4) 夏濟安『黑暗的閘門』(Tsi-An Hsia: *The Gate of Darkness: Studies on the Leftist Literary Movement in China*. Seattle, WA: University of Washington press, 1968)
- (5) 李欧梵『中国現代作家的浪漫一代』(Leo Ou-fan Lee: *The Romantic Generation of Modern Chinese Writers*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1973)

## ポスト冷戦時期の文化批評

- (6) 梅儀慈 『丁玲の小説：現代中国文学中の叙事與意識形態』 (Yi-tsi Mei Feuerwerker: *Ding Ling's Fiction: Ideology and Narrative in Modern Chinese Literature*. Cambridge, MA.: Harvard University Press, 1982)
- (7) 金介甫 『沈從文傳』 (Jeffrey C. Kinkley: *The Odyssey of Shen Congwen*. Stanford California: Stanford University Press, 1987)
- (8) 萊爾 (William A. Lyell, Jr) 『魯迅的現實觀』 (William A. Lyell, Jr: *Lu Hsün's Vision of Reality*: University of California Press, 1976)
- (9) 李歐梵 『魯迅及其遺產』 (Leo Ou-fan Lee, ed: *Lu Xun and His Legacy*. Berkeley, CA: University of California Press, 1985) 『鐵屋中的吶喊』 (Leo Ou-fan Lee: *Voices from the Iron House: A Study of Lu Xun*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1987)
- (10) 吳茂生 (Mau-sang Ng) 『中国現代小説中の俄国英雄』 (Mau-sang Ng: *The Russian Hero in modern Chinese Fiction*. New York: State University of New York Press & Hong Kong: The Chinese University Press, 1988)